

発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第11回】
生活と文化をつくり出すしごと



金沢大学
河合隆平

かわい りゅうへい
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全
障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著
書に『発達保障ってなに?』共著（全障研出版
部）など。

教育実践は、社会の現実や要求を受けつつ、その人が
生きるため、発達するために必要とする生活と文化をよ
りよいものへとつくり変えながら、その人のなかに人格
を刻んでいく仕事といえます。今回は「権利としての障
害児教育」を打ち立てていく教師の仕事のなかに、教育
実践に固有の働きを確かめ、その力が十分に発揮される
ために必要なことを考えてみます。

だれが「精神薄弱」と呼ぶのか？

東京都豊島区の大塚中学校特殊学級で、障害児教育研
究を志す大学院生清水寛は非常勤講師をしていました。
『J組』とよばれたその教室は、学校の裏門近くの陽の
当たらない校舎の隅にありました。1967年1月、清
水は、日教組の教育研究全国集會に参加してみんなと同
じ学級に学ぶ生徒の教育について勉強してくるから来週
の授業は休みにしたい、と生徒に伝えました。

すると、じつと考えていた様子の女子生徒が「先生、
その子たちもトクシユとよばれているんですか」と質問
してきたのです。清水はためらいながら黒板に「精神薄
弱」と書き、世間の人びと、自分たち教師でさえも、み
んなと同じ子どもたちのことを「精神薄弱」と呼び、法
律でもその言葉が使われていることを話しました。そし
て「だれが、どうして、私たちをそう呼ぶのか」と憤る
生徒たちに、「精神」が「薄弱」とはどういうことかを
話し合ってみようと投げかけます。

これらの怒りは悲しみの深さに通じていました。「家
で、小学校の妹の教科書を、かくれて、そつとのぞいて
みたら、読めない字や、わからないところがいっぱいあ
った。つらくて、自分で自分の頭を血が滲むほど、叩い
て、泣いたことがある」。『普通学級』からはじき出さ
れ、J組では能力の高い生徒が低い生徒を馬鹿にし、力

の弱い生徒がいじめられる。みんな、そうしたつらい経
験や葛藤を抱えながら「特殊学級」に学んでいました。

私たちは精神が薄くも弱くもありません

清水は、みんなの考えを全国の教師に伝えるから「私
たちは精神薄弱か」という題で作文を書いてくるよう宿
題を出します。すると22人全員が一週間かけて書いてき
たのですが、そのなかで言語障害と重知的障害のある
M子はたどたどしく、しかし一字一字刻みこむように繰
り返していました。「M子せいしん、うすくない。M子
せいしん、よわくない。M子せいしん、うすくない。M
子せいしん、よわくない。…」清水は生徒たちの怒り
と悲しみをくぐった「人間宣言」に打ちのめされなが
ら、作文を手に教研集會に向かいました。

ちょうど、日教組教研では「特殊教育」分科会が「心
身障害児教育」（第15次・1966）、「障害児教育」（第
16次・1967）へと名称を変えていく時期でした。障
害のある子どもたちを社会に順応させる「特殊な教育」
ではなく、障害の重い子どもにもひとしく教育を保障し
ようと「権利としての障害児教育」を求める教師たちは
「私たちは精神が薄くも弱くもありません。精神薄弱と
いわないでください」との中学生のねがいを真摯に受け
とめました。

生徒たちは、全国の教師たちが真剣に議論してくれた
ことを知って喜びました。自分たちは勉強は遅れている
かもしれないが、人間としての心のはたらきは他の人と
少しも変わらない。生徒たちは差別「される側」にいる
自分たちを徹底的に見つめていくことで、差別「する
側」の価値観を乗り越えながら、人に踏みつけにされ
ず、人を踏みつけにもしない人間関係や学級集団をめざ
していきます。J組の学級通信は「一人はみんなのため

に、みんなは一人のために」、生徒の新聞は「仲良新
聞」と名づけられていました。

文化を獲得しながら発達する

1967年、群馬県佐波郡東中学校に転勤した校長
の田村勝治は、その特殊学級の状況に衝撃を受けま
す。教室はカーテンが閉められて薄暗く、生徒たちも他
の人に見られるのが恥ずかしいという。そして「この子
たちは人の嫌がることを進んでやるのが大事」だとし
て、生徒たちは学校中の便所掃除を買って出たり、少
しの手間賃をもらって下請けのような作業学習が行われ
ていたのです。「全国各地で数多くの特殊学級が設けられ、
それらがさまざまな、きびしい状況の中で運営されてい
る。だから特学に入級することが子どもにとって幸せな
のでなく、どんなふうにも教育されるかが子どもの幸せを
つくっているのである」。生活綴方に学びながら障害児
教育にとりくんできた田村はこう考えて、悲しみや苦し
みを背負う生徒たちが誇りや自信をもって学ぶことので
きる教育内容を探っていきます。

その数年前、佐波郡境町の采女小学校の特殊学級担任
坂爪セキは、ある小学校特殊学級の公開研究会に参加し
ていました。ところが「お遊び的な授業」に不満が残
り、帰り道に仲間と「もつと本気になって勉強がしたい
よね」などと話したことがきっかけとなり、1963年
に障害児教育研究サークル「放談会」を立ち上げます。
当時、全国的に注目されつつあった群馬の教育実践です
が、放談会に田村が参加することで勢いが増しました。

子どもは、人間がつくりあげてきた文化を獲得するこ
とで発達する。群馬の教師たちはこの原則に立ち、障害
のある子どもの教科指導を追求しました。子どもの考え
る・わかる過程を大切に、文化を系統立てて教えるこ